

日常のことなのに、ふと疑問に思うことがあります。たとえば、2月という月だけが短いのは何故でしょう。ウィキペディアによると、「2月だけ28または29日なのは、ローマ帝国の初代皇帝アウグストゥスが紀元前8年、自分の誕生日である8月の日数を30日から31日に変更し、そこで不足した日数を2月から差し引いたためである。ローマ暦では、年初は3月であったため、単に年末の2月で日数を調節した。」 暦の歴史は複雑ですが、それにしても暦を自由に変えるとは驚きです。

2月は短い月ですが、医療関係者にとってはインフルエンザの流行期間でもあり身体的にも精神的にも負担のかかる月です。今シーズンのインフルエンザ流行は早いと予想されています。インフルエンザワクチンの品不足も危惧されています。いつも言うことですが、バランスの良い食事と良質な睡眠をこころがけて、来るべき冬を乗り切っていきましょう。

【最近目立つ病気】

8月末から9月にかけて一部でインフルエンザがみられました。その後しばらくは報告がありませんでしたが、冷え込みが厳しくなり、また散発しています。夏風邪（手足口病も含む）はまだみられます。気温の低下とともに胃腸炎が目立ってきました。例年11月からノロウィルスの流行が1月頃までみられます。うがい、手洗いの励行が大切です。今年夏から秋にかけてRSウイルス感染症が大流行しました。まだ名残が続いています。溶連菌感染症も時々みられます。感染症ではありませんが、川崎病も目立っています。これについては、以下で説明します。

【川崎病】

1967年に東京渋谷区の日赤中央病院（現在の日赤医療センター）小児科の川崎富作先生がこの病気を発表しました。今日、川崎病として世界共通の病名と呼ばれ、全世界の乳幼児を襲っており、いまだその原因は不明です。

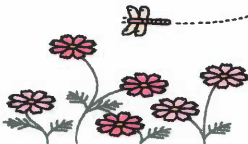
川崎病は高熱が続き、両目が赤く充血し（目やには出ない）、唇が真っ赤になり、舌がイチゴ状に赤くなり、喉の粘膜も赤く腫れ、手足や体に大小さまざまな形の発疹が出て、首のリンパ節が腫れて痛み、手足が硬く腫れ、手のひらや足の裏が全体に赤くなります。熱が下がる頃、指先の皮がペロリとむける症状が特徴的です。ただし、こうした症状が出そろわない、いわゆる不全型の川崎病もあります。川崎病にかかる子どもは1歳前後をピークに4歳以下の乳幼児が多く（全体の80%以上）、男子がやや多いです。再発することが2~3%あります。

川崎病は全身の血管に炎症を起こす病気と考えられており、最も問題となるのは、心臓の筋肉に酸素や栄養を送る冠動脈という血管に後遺症が残るかどうかという点で、全患者の約10%前後の子どもが冠動脈障害を残してしまい、冠動脈が拡張したり、瘤（コブ）ができてしまします。しかし、いったん拡張したり、瘤ができた冠動脈も自然に小さくなり、正常な大きさになる場合がほ

とんどです。非常に少ないケースですが、瘤の中で血液の固まり（血栓）ができてしまい血流を塞いだり、瘤の出入り口が狭くなり、冠動脈が詰まってしまい、いわゆる心筋梗塞発作を起こし死亡するケースもあります。そのため、冠動脈に障害が残った場合は血液が固まらないように薬を飲み続けなければなりません。しかし、薬を飲み続けていても、残念ながら狭くなったり、詰まってしまふ場合もあります。こうした例に対してはカテーテルという管を入れ、風船を膨らませて押しひろげたり、血管の内側の肥厚している膜を削る治療も試みられており、また、外科的治療としてバイパス手術を施行する場合もあります。

川崎病が発表されてから半世紀。かかった子どもが将来どのような経過をたどるかは、まだまだわかってはいません。川崎病にかかり冠動脈に後遺症が残ってしまった子どもはもちろんのこと、たとえ後遺症がないと言われた場合でも定期的な検査を受けることが大切です。また川崎病では心臓以外にも全身のいろいろなところに炎症が起きて多彩な症状を起こすことがあります。例えば髄膜炎、関節炎、胆のう炎などです。川崎病の急性期の治療はガンマグロブリンの大量療法です。しかし、そのガンマグロブリン療法を行なっても、解熱せず、炎症反応が続く例があり、そうした症例に対してどのような治療をすればいいのかが問題になっており、結論は出ていません。

（川崎病の子供をもつ親の会ホームページより一部改変）



【アレルギーコンポーネント検査】

現在、アレルギー検査として総IgEや特異IgEが広く用いられています。総IgEはアレルギー体質の診断や経過観察の目的でIgEの総量を測定し、特異IgEはスギ花粉やダニ、卵、牛乳などアレルギーの原因となる抗原（アレルゲン）との反応性をみるため、すなわちアレルギーの原因を検

索するために測定します。

アレルゲンには多数の蛋白質が含まれていて、特異IgEは個々の蛋白質と反応します。特異IgEと反応し、アレルゲン活性を有する蛋白質のことをアレルゲンコンポーネントといいます。

特異IgEの多くは花粉や食品などアレルゲン原料から抽出した様々な蛋白質（粗抽出アレルゲン）に対するIgEを測定していますが、粗抽出アレルゲンの中には複数のアレルゲンコンポーネントが含まれており、感作の原因や感作経路によって臨床症状に差異が出ることが判ってきました。このアレルゲンコンポーネントに対する特異IgEを測定する検査をアレルギーコンポーネント検査といい、最近注目され、実用化が進んでいます。

現在、卵白（ホムロト）、牛乳（カゼイン等）、小麦（ω-5グリジン）、ピーナッツ（Arah2）、大豆（Glym4）といったアレルゲンコンポーネント検査が保険適用されており、粗抽出アレルゲンとアレルゲンコンポーネント特異IgEを組み合わせることで、より正確なアレルギー診断に役立つと期待されています。（CRCグループホームページより一部改変）

おしらせ



☆大手町の夜間急病診療所（Tel:222-0099）では午後7時から11時まで、小児科と内科の診療を年中無休で行っています。加畑の担当は、11/30、12/7、12/28の予定です。

☆金沢市では幼児期の任意接種のワクチン（おたふくかぜ・インフルエンザ・B型肝炎ワクチン）についての助成金制度を行っています。詳細は受付でお尋ね下さい。

☆世界の宝「憲法9条」を次の世代に贈りましょう。

